

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



和田 勝さん

昭和10年9月25日生まれ。
柳町地区在住

私の生い立ちと

子どもの頃の思い出

私 は昭和10年、浦幌町で酪農家の二男として生まれました。小学校へ入学した年に太平洋戦争が開戦、勉強どころでなく、夏は草取り、冬はまき切りを手伝いました。戦時中、親に連れられて小学校の校庭に集まり、旗を振りながら地域の出征兵士を送りました。昭和20年7月本別空襲の日、低空飛行をする大きな飛行機を見て、慌てて木の中に隠れたことを今でも鮮明に覚えています。

川西農業高校

林業科へ進学

中

学校を卒業後、山に興味を持つようになった

私は昭和26年に川西農業高校（現在の帯広農業高校）林業科に進学しました。当時は帯広から十勝鉄道が通っていません。懐かしい思い出です。林業の基礎を学びながらの寮生活、得た友人と貴重な体験は後の宝物となっています。

音更町森林組合に

就職

昭 和29年、縁あって音更町森林組合に就職しました。昭和26年に森林法が出来たばかりで、役場の中に借りした事務室に2人体制。毎日3町歩の苗畑でカラマツの床替え、伐採した柏の防風林の根っこ取りは馬耕時代でしたのでとても苦勞しました。生長が早いカラマツは、15年で炭鉦の坑木、30年で電柱として重宝されたので、カラマツ造林に力を注ぎました。

昭和42年、木材チップ工場の操業は森林組合にとつて大きな転換期となり、間伐を行って良質な大径材（丸太）を作り、用途は建築材に変わっていききました。昭和62年、独自の間伐方法

によるカラマツの長伐期育林について、全国育樹祭で発表し、多くの人がその間伐方法に注目するようになりました。平成6年、森林組合を定年退職し、同年自らの会社を立ち上げ、現在も山と森に関わる仕事を続けています。

柳町に住んで40年

地域への思い

私 は昭和51年に家を新築、柳町団地へ引っ越してきました。新しい団地で顔が分からぬもの同士、みんな小学校の開校や町内会活動に関わってきました。近くに学校や病院、商業施設に葬儀場まであり、こんなに便利な場所はないと感謝しています。

しかし、40年も経つと高齢者が増え、息子世代はほとんどいない。町内会に入るメリットがないと言われ、運営自体が大変になってきていますが、メリットの有無はななく、なんとか協力しあわなければなりません。柳町地域では、盆踊りを毎年実施しています。役員も高齢になり、会場準備も大変で



▲全国育樹祭会場の様子

もう止めようかと話しが出た時もありましたが、柳町の文化を何とか継承していこうとみんなで後押ししました。若い世代も住みたいと思う、元気な地域であってほしいです。

未来へ向けて 伝えたいこと

昨 年、4つの台風が十勝地方に甚大な被害をもたらしました。昔から森林が、私たちを災害から守ってくれていると言われてきました。木を切り倒し活用することも必要ですが、その生長には長い年月を要します。森林一筋に生きてきた人間として、これからも森林を生かした「山づくり」の大切さを伝えていきたいと思います。